

わが国最高齢の現役医師による「いのちの授業」

菊田 文夫¹⁾ 日野原重明²⁾

Lectures about Life by the Oldest Practicing Physician in Japan

Fumio KIKUTA, PhD¹⁾ Shigeaki HINOHARA, PhD, MD²⁾

[Abstract]

Dr. Hinohara, who is a coauthor and Japan's oldest practicing physician, has given many lectures on the topic of life at elementary, junior high, and high schools across Japan to teach the dignity of life through talks about his life experience and his way of life rooted in a sense of responsibility as a physician. In this study, we observed three lectures about life given by Dr. Hinohara to the upper grade students at several elementary schools; our aim was to develop a protocol common to all lectures and to organize his guidance (teaching process) in chronological order. Our results revealed that Dr. Hinohara discussed two concepts of human life—that life is like the air and wind, extraordinarily precious even though we cannot see it, and that life is a limited time that we are given to use. By defining the abstract concept of human life, which cannot be picked up and shown in one's hand, as a limited time that each student can use, Dr. Hinohara hopes to teach students to appreciate the life that has been given to them and to foster an attitude of continuing to question how life should be led to improve its quality. In addition, he talked in the lectures about how he lives earnestly now throughout his life, with only a few mentions of death. This suggests that, as a physician who has experienced the deaths of many patients in clinical practice, he has a philosophy that death is part of life. Our findings also suggest that because of his belief that true love is love of human life, Dr. Hinohara strongly hopes to convey that adults sincerely care about children and their growth and want them to live in a peaceful world with no bullying or conflict.

[Key words] lectures about life, elementary school students, oldest practicing physician in Japan, lecture analysis

[要 旨]

本研究では、日野原が小学校高学年児童を対象として実施した3回の「いのちの授業」を観察し、これらの授業に共通するプロトコルを作成し、その指導過程を経時的に整理した。その結果、授業者が児童に伝えている「いのち」の概念については、「いのちとは、空気や風のように、私たちの目には見えないが、とても大切なものであること」「いのちとは、自分が使うことのできる限られた時間であること」が明らかになった。授業者は、手にとって見せることができない、抽象的な「いのち」の概念を、自分が使うことのできる限られた時間と説明することによって、与えられたいのちに感謝し、いのちの質を高める生きかたについて問い続ける姿勢を児童に育んでほしいと願っている。さらに、授業者が行う「いのちの授業」は、生涯を通じていまを真剣に生きる生きざまが語られ、死についてふれる機会が少ない。この理由としては、臨床の場で多くの死を看取ってきた授業者の、死を生の一部として捉えるという哲学に依拠するものであると考えられる。

[キーワードズ] いのちの授業, 小学生, 日本の最高齢現役医師, 授業分析

-
- 1) 聖路加国際大学看護学部基盤領域・St. Luke's International University, Social Sciences & Humanities / Fundamentals of Research
 - 2) 聖路加国際大学名誉学長・St. Luke's International University, Honorary president

受付 2016年10月28日 受理 2016年11月28日

I. はじめに

いじめによる自殺という痛ましい事件が報道され続けているなか、わが国の国民すべてについて、いのちの尊厳を重んじる意識の醸成がいつそう求められている。これに応えるためには、これまでに行われてきたいのちの教育をふり返り、いまを生きる児童・生徒の現状に即した実践に高めていく取り組みを続けていかななくてはならない。いのちの教育に関する先行研究をみると、性を主題とする授業実践に関する研究^{1, 2)}、妊婦や末期がんの患者を招いた授業の実践³⁾、育てた家禽を殺して食べる授業に関する考察^{4, 5)}、動物飼育を経験した子どもの変化について、いのちの教育の視点から考察したもの⁶⁾、教育現場における、死を主題とする教育の実態や動向について述べたもの^{7, 8)}、あるいは道徳教育の観点からいのちの授業の意義について述べたもの^{9, 10)}などがある。そのなかにあって、わが国最高齢の現役医師である共著者、日野原は、これまでに全国の小、中、高等学校において、自らが歩んできた人生の体験や、医師としての使命感に根ざした生きざまについての語りを通して、いのちの尊厳を伝える「いのちの授業」の実践を多数重ねてきた。本研究では、日野原（以下、授業者と表記する）が複数の小学校で高学年児童を対象として実施した「いのちの授業」を観察し、客観的に分析を行った結果について報告する。

II. 研究目的

本研究では、授業者が小学生を対象として実施した「いのちの授業」を観察することにより、次の3点について、著者が健康教育学的観点から整理することを目的とする。

- ①授業者が伝えている「いのち」の概念
- ②自らが歩んできた長い人生の体験に基づいて語られた「いのち」への想いや、将来を生きる児童に向けた「生きかた」への提案
- ③児童と授業者の空間に生まれた雰囲気

III. 研究方法

2012年2月、5月、および6月に、東京都内の公立小学校2校と私立小学校1校において、授業者がそれぞれ45分で実践した「いのちの授業」を対象とした。いずれの小学校においても4年生の児童すべてと希望する保護者や教諭が同席したため、授業の受講者は50名を超えている。

授業の記録にあたっては、それぞれの小学校から承諾を得たうえで、授業者の語り、発問、板書を正確に記録するために、授業者のビデオ撮影を行った。ビデオに記

録された授業者の発言に基づいて、3回の授業に共通するプロトコルを作成し、その指導過程を経時的に整理した。さらに、研究目的で述べた3点について、作成したプロトコルを根拠とする結果を導いた。

IV. 研究結果

授業者が実施した3回の授業の指導過程を表1に示す。これらの授業のプロトコルについて分析したところ、授業者が児童に伝えている「いのち」の概念については、次の2点に整理することができた。

- ①「いのち」とは、空気や風のように、私たちの目には見えないが、とても大切なものであること
- ②「いのち」とは、自分が使うことのできる限られた時間であること

これらを裏付ける授業者の語りについては、表2に示す通りである。

一方、児童に向けて授業者から語られた「いのち」への想いや「生きかた」への提案は、次の7点に整理することができた。

- ①小学生の時期は、自分が使える時間を自分のためだけにたっぷり使って成長し、大きくなったら、自分が使える時間を他者のためにぜひ使って欲しいこと
- ②病気や入院は、決して悪いことばかりではなく、その体験が自分にとってプラスになることが必ずあること
- ③小学校で学ぶあらゆる科目に、いのちについての学びが含まれていること。そして、小学校での学びが、将来、自分のいのちを他者のために活かしていく資源としてとても大切であること
- ④子どもは大人から学ぶだけではなく、大人に教える体験を通じて心豊かになること
- ⑤日本史と世界史の学びを通して、戦争はあってはならない、そして、いじめも友だち同士の戦争のようなものであるから、いじめもあってはならないと感じて欲しいこと
- ⑥野口雨情が作詞した「シャボン玉の唄」の歌詞に描かれているように、大人、特に母親や父親は、子どもたちの成長を心から願っていること
- ⑦これからの世界を担う重要な役割を果たすべき人生の後輩として、一人ひとりにとっても期待していること

これらを裏付ける授業者の語りについては、表3に示す通りである。

児童と授業者の空間には、毎回、授業者から頻回に行われる発問と指名によって、児童一人ひとりが、授業者とともに「いのちの授業」をつくりあげていく雰囲気が生まれている。さらに、ピアノの演奏や暗算を得意とす

表1 日野原重明「いのちの授業」の指導過程

	学習活動・内容	教師の支援	評価
導入	<p>校歌をみんなで歌う。</p> <p>授業者（日野原）を自分の身近な人間として捉え、人生の先輩から、自らの人生を生きるための哲学を学ぶ姿勢を整える。</p> <p>得意なことは人それぞれ。他者の優れたところをリスペクトしよう。</p> <p>得意なことをクラスメイトの前で披露し、それらを皆で共有する時間を持つ。 披露した子どもを皆でリスペクトする。</p> <p>いのちの授業は小学校で学ぶあらゆる科目との関係が深いことを知ろう。</p> <p>0歳から100歳までの人生を数直線で表したとき、自分の年齢がどのあたりに位置するのかを示す。 2桁×2桁の暗算に挑戦する。 「いのち」を主題とする俳句をつくって発表する。 世界地図を書いて日本がどこに位置するのかを示す。 ホワイトボードをゴールに見立ててペナルティキックを蹴る。</p>	<p>授業者の自己紹介。 これまでの人生で得た生活体験を自らのことばで語る。</p> <p>ピアノを習っている子ども、俳句をつくる子どもなど、クラスメイトに比べて得意とするスキルを、皆の前で発表する機会を提供する。</p> <p>いのちの授業とは関係が薄いと考えられがちな教科目についても、いのちの大切さや素晴らしい、いのちの使い方についてじっくり考えるために欠かすことができない視点を与えてくれる。さらに、自らの生きかたを決めるためには、小学校で学ぶすべての教科目から学んだ知識や体験がとても重要であることを伝える。</p>	<p>(関心・意欲・態度)</p>
展開	<p>「いのち」は心臓ではなく、目に見えないもの、自分の「いのち」はどこにあるのか、「いのち」は目に見えるものか、手でさわられるものか、について、自分の考えを述べる。 心臓の大きさに近い果物（サンプル）を選ぶ。 心臓の音を聴診器で聴くこと、脈拍を数えることを体験する。</p> <p>空気と同じように、目に見えない「いのち」は、空気は目に見えるものか、風は目で見るることができるのか、について、自分の考えを述べる。 アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリが著した「星の王子さま」の話を知っている人に、きつねが王子さまに言ったことばを紹介してもらう。</p> <p>「いのち」は、自分が使うことのできる時間であることに気づこう。</p> <p>「いのち」とは何か、「寿命」とは何か、について考える。「生きている」ということは、どのようなことを意味しているのか、について考える。</p> <p>子どもはいまの時間を自分のために使って、何時に起きて何時に寝たのか、朝起きてから夜寝るまでに何をしたのか、についてふり返る。 誰のために勉強したり、誰のために宿題をするのか、を考える。</p>	<p>触ることができないものであることに気づこう。</p> <p>心臓が止まると死んでしまうのだが、心臓＝「いのち」ではなく、心臓は血液を全身に送るための単なるポンプであることに気づかせる。 人間の心は、脳にあることを伝える。</p> <p>私たち人間にとって、とても大切なものであることを知ろう。</p> <p>空気も風も、生きものが生きていくためには欠かすことができない大切なもの。しかし、それらは目に見えない、触ることができないものであることを伝える。</p> <p>「いのち」、「寿命」とは、目に見えないが、一人ひとりが持っている時間、使うことのできる時間であることを伝える。 「生きている」ということは、自分自身が使える時間を持っていることに気づかせる。</p> <p>大人になったら時間を他者のために使おう。</p> <p>いま自分が持っている使える時間は、全部自分の成長のために使うことが大切である。そして将来、大人になったら、他者のために自分の時間を使って欲しいことを伝える。</p>	<p>(知識・理解)</p> <p>(知識・理解)</p> <p>(知識・理解)</p> <p>(思考・判断)</p>
整理	<p>シャボン玉の唄に込められている作者の気持ちを感じよう。</p> <p>シャボン玉の唄の作詞者、野口雨情が、この唄に込めた想いを知り、その想いをみんなで共有する。 シャボン玉の唄をみんなで歌う。</p> <p>戦争は絶対に避けなくてはならないものであることを忘れずにいよう。</p> <p>戦争をしない、世界に平和をもたらすために、一人ひとりができることを考える。</p>	<p>幼いわが子を亡くした野口雨情の想い、せっかく生まれた子どもが死んでしまわないように、大きく成長して、世界で活躍できるような人間に成長して欲しいという、祈りがこもっている唄であることを伝える。 祈りのこもっている唄だから、立って歌うように促す。</p> <p>シャボン玉の唄は、いのちを大切にしようという唄であることを確認する。 いじめは、友だち同士の戦争みたいなものだから、いじめもあってはならないことだと伝える。 児童に感謝のことばを述べる。</p>	<p>(技能・表現)</p> <p>(思考・判断)</p>

表2 授業者が児童に伝えたい「いのち」の概念

- ① 「いのち」とは、空気や風のように、私たちの目には見えないが、とても大切なものであること
- 「風がなければ、雨をもった雲をこの上に運んで、雨を降らすことはない。雨が降るから水がくる。海の水や川の水になる。それを持ってくる風は見えない。だから、空気も酸素も風も、目に見えないものが大切なものであって、いのちも目に見えない。触れない。」
- 「大切なものは、触れることができない、目に見えないように、いのちというのは、持っているものを触ったり、目で見たりできない。体に持っているんだけど、どこにいのちがあるのか、非常に難しい。」
- ② 「いのち」とは、自分が使える時間であること
- 「私は100歳の時間をもって生きている。寿命とは、皆さんが持っている時間のこと。」
- 「生きているということは（いのちがあるということは）君たちが使える時間を持っている。」

表3 授業者が児童に伝えたい「いのち」への想いや「生きかた」への提案

- ① 小学生の時期は、自分が使える時間を自分のためだけにたっぷり使って成長し、大きくなったら、自分が使える時間を他者のためにぜひ使って欲しいこと
- 「君たちのすべての時間は、自分のために使っているんですよ。君たちが成長するためには、君たちが使える時間を自分のために使うのは非常に大切なこと、いいですよ。でも、君たちが大きくなったら、君たちが持っている時間を、自分のために使う以外に、誰かのために自分の持っている時間を使うことができるんですよ、大きくなったら。」
- 「将来は人のために自分の時間を使うということを、ぜひ皆さんにやって欲しい。」
- ② 病気や入院は、決して悪いことばかりではなく、その体験が自分にとってプラスになることが必ずあること
- 「皆さんは元気だから、私のように1年間運動を止められたということはないと思う。とても悲しかったですよ。運動ができないこと。それでも、病気をしたためにピアノを習うことができたんですよ。だからね、そのときにはつらいと思ったけれど、あとから考えると、病気のためにそれができたと思う。いま感謝している。」
- 「病気をして、損をすることだけでなく、得をすることもある。」
- ③ 小学校で学ぶあらゆる科目に、いのちについての学びが含まれていること。そして、小学校での学びが、将来、自分のいのちを他者のために活かしていく資源としてとても大切であること
- 「今日のいのちの授業には、社会、国語、音楽、算数、体育など、いろいろな内容が含まれている。」
- 「皆さん、授業というと、算数、国語、あるいは音楽、体育、保健の授業があるでしょ。私の授業はいのちの授業。音楽、体育、社会、英語の時間もあるし、いろんな内容がはいっていますよ。」
- ④ 子どもは大人から学ぶだけでなく、大人に教える体験を通じて心豊かになること
- 「帰ったら、お父さんやお母さんに、こぶしの大きさが心臓の大きさだと教えてあげて。」
- 「保護者の皆さんに申しますが、教育は子どもに何でも教えるのではなくて、子どもが家に帰って親に教えるのが教育。子どもは、親に教えたという非常に気持ちが豊かになる。だから、習うことばかりでなくて、自分が教えるということ。」
- ⑤ 日本史と世界史の学びを通して、戦争はあってはならない、そして、いじめも友だち同士の戦争のようなものであるから、いじめもあってはならないと感じて欲しいこと
- 「戦争は、兵隊でなくても、長崎のように市民が死んでしまう。そういう戦争があってはならない。だから、小学生のときから戦争はあってはならない。だから、いじめも友達同士の戦争みたいなものだから、いじめもあってはならない。」
- 「日本がアメリカを攻撃して戦争を始めた。間違った戦争ですね、こういうことをやってはならない。そういう歴史は大切なこと。」
- ⑥ 大人、特に母親や父親は、子どもたちの成長を心から願っていること
- 「野口雨情の子どもが亡くなった。生まれて間もなく亡くなった、せっかく生まれたいのちがはかなく壊れてしまうことは悲しいことだから、そのようなことがないように、子どものいのちが大きく大きく成長して、大きなシャボン玉のようになって、空高く飛んで行って欲しい、そんな、いのちのお祈りのです。風が乱暴に吹くと、シャボン玉が壊れるから、そっと吹いてくれ、そして、シャボン玉の泡が大きくなるように、子どもが成長して、世界で活躍して欲しいという、野口雨情のお祈りの歌。」「お祈りの歌を唄うわけですから、みんな立って。」
- ⑦ 授業者が、自分たちをこれからの世界を担う重要な役割を果たす後輩として、一人ひとりとても期待していること
- 「皆さんが大きくなったら、世界に平和をもたらすために、何ができるかを考えてください。」

る児童が、そのスキルを披露する場面に授業者が設けることによって、児童同士でお互いの優れたところを認め合い、賞賛し、敬意を表する雰囲気醸成されている。

V. 考察

授業者は、手にとって見せることができない、抽象的な「いのち」の概念を、自分が使うことのできる限られた時間と説明することによって、与えられたいのちに感謝し、いのちの質を高める生きかたについて問い続ける姿勢を育んでほしいと願っている。これは、人生が線や平面で終わるものではなく、立体的でボリュームのあるものとして捉えるためには、いま何をしなければならぬのか、自分の生活をどのように改めるのかを考えなくてはならない¹¹⁾という授業者の人生観に依拠するものであると考えられる。

本研究の対象とした「いのちの授業」では、生涯を通じていまを真剣に生きる生きざまが語られ、死についてふれる機会が少ない。これについては、授業者が過去の著書¹²⁾において、死を生の一部として捉えること、死を人生のゴールとして考えることによって、自分がどのような生を生きなければならないのか、真剣に考えるべきであると述べているように、臨床の場で多くの死を看取ってきた¹³⁾授業者の哲学に基づくものであると考えられる。

また、私たちが持っている本当の愛情は「いのち」への愛情である¹⁴⁾という想いから、授業者は、大人は子どもたちの成長を心から願っていること、いじめや争いのない平和な世界に生きてほしいと願っていることを、伝えたいという強い想いを懐いていると考えられる。

さらに、一人ひとり個性ある存在であり、それぞれが果たすべき使命をもって生まれてきていること、この時期に経験するすべての学びや体験は、将来、自分が他者のために生きる貴重な糧になることを、授業者が「いのちの授業」を通して伝えることは、児童の自尊感情や自己効力感を高める効果につながると考えられる。

先行研究をみると、自分が生かされている存在であることに気づく³⁾、自尊感情を育む¹⁵⁾、他者のために生きたいと希求する生きかたを醸成する¹⁶⁾、など、いのちの教育の大切な概念を伝える多くの授業が実践されている。このような背景のもと、わが国最高齢の現役医師が実践し続けてきた「いのちの授業」の意義は大きい。

引用文献

- 1) 堀内寛子, 服部律子, 清水智美他. 小学生への性教育の実践. 岐阜県母性衛生学会雑誌. 2007; 37/38: 61-68.
- 2) 比良静代, 河瀬しのぶ, 金子紀子他. 助産師によるいのちの教育(性教育)における小学低学年児童の学び. 島根母性衛生学会雑誌. 2013; 17: 39-48.
- 3) 金森俊朗. いのちの教科書 学校と家庭で育てたい生きる基礎力. 東京: 角川書店; 2003.
- 4) 村井淳志. 「いのち」を食べる私たち. 東京: 教育史料出版会; 2001.
- 5) 杉山緑. 「いのちの教育」の検討. 山口大学教育学部研究論叢(第3部). 2004; 54: 55-65.
- 6) 立川奏枝, 田中理絵. 小学校教育における動物飼育といのちの教育. 山口大学教育学部研究論叢(第3部). 2010; 59: 191-205.
- 7) 中村一基. 「死への準備教育」の動向-教育現場で実践できるカリキュラムを求めて-. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要. 2002; 1: 127-133.
- 8) 岡田芳廣. 学校における死についての教育の実態と実践について. 早稲田大学大学院教職研究科紀要. 2014; 6: 1-13.
- 9) 滝沢利直, 森本倫代, 滝沢美津子. 「いのちの授業」の今日的意義について-一道德教育の観点から-. 東京工芸大学工学部紀要. 2008; 31(2): 50-60.
- 10) 秋山麻実. 「生と死の教育」と道德教育の間. 教育実践学研究. 2015; 20: 105-113.
- 11) 日野原重明. 生きることの質. 東京: 岩波書店; 1993. p.78-79.
- 12) 11) p.27-52.
- 13) 日野原重明. 死をどう生きたか. 東京: 岩波書店; 1983.
- 14) 日野原重明. 生の選択. 東京: 日本YMCA 同盟出版部; 1981. p.130.
- 15) 近藤卓編著. 基本的自尊感情を育てるいのちの教育. 東京: 金子書房; 2014. p.24-39.
- 16) 菊田文夫, 大津一義. 小学生の自尊感情を育むいのちの授業. いのちの教育. 2016; 1(1): 2-9.